

赤と青のレクイエム

登場人物

鷹丸
月影
サヤカ
カノミ
不知火

影友
忍者

菊
梅
母

望月凜
語り部
黒服の男達

プロローグ

幕が上がると、舞台中央に望月凜が立っている。
望月凜は『赤と青のレクイエム』の進行役である。

望月 私は今日のこの劇の進行役を務める望月凜です。まずはじめに今日ここに紹介する物語が、どのようにして生まれたかを話さねばなりません。

私は大学で山姥^{やまんば}について研究しています。民話として各地に残っている山姥の伝説がどのようにして生まれたかを調べているのです。そして、鬼原村の存在を知りました。鬼原村は平安の世に、浅間山の大噴火で村ごと埋まってしまった場所です。そして、村が埋まる前にはそこに山姥が生き残っていたという言い伝えが残っている場所です。私は、一年前にその鬼原村を訪れました。

村に着いた私の目に飛び込んできたのは、村の北側に位置する鬼原山でした。その山が自分を呼んでいる気がしたのです。私は、衝動的に鬼原山を登り始めました。一時間ほど登ったところで、天気が急変し、突然雨が降ってきました。そして、その雨は周りが見えなくな

るほどの土砂降りとなり、私は崖崩れに遭ったのです。

どれくらいの時間がたったのでしょうか。私は頬を伝わる冷たい滴に目を覚ましました。奇跡的に助かったのです。その時です。誰かが話しかけてくるではありませんか。その声は火山灰の中から聞こえてきます。私は素手で火山灰を掘っていきました。そして、そこでしゃれこうべを見つけました。私に話しかけてきたのはそのしゃれこうべだったのです。

しゃれこうべが私に語ったのは山姥にまつわる悲しい話でした。そしてその話には、山姥の謎を説き明かすメッセージが含まれていたのです。

私はしゃれこうべが語った話を書き留めました。そして、一人でも多くの人に、その話を知ってもらいたくて、一年がかりでその話をもとにした劇を創りました。それがこの『赤と青のレクイエム』です。

話が長くなりました。それでは、皆様を『赤と青のレクイエム』の世界へご案内いたしましょう。

語り部 1 時は天仁元年。西暦でいうと一一〇八年のこと。

語り部 2 平安時代と呼ばれる世の中でこの物語は始まる。

語り部 3 みなさんはこの時代にも忍者が存在したのをご存知だろうか。

語り部 4 忍者は戦国の世にのみ活躍したわけではないのだ。

語り部 5 『赤と青のレクイエム』に登場する風賀忍者もこの時代に生まれた。

語り部 6 いったいどんな目的で？

語り部 1 山姥だ。

語り部達 山姥？

語り部 1 そう、山姥だ。

語り部 2 この地方は浅間山の噴火から、冷夏による飢饉が頻繁に起こった。

語り部 3 人々はそれを山姥の仕業と考えた。

語り部 4 さて、山姥とは何か？

語り部 5 山姥の姿形は我々と変わりはない。

語り部 6 そのため、外見では山姥を見分けることは困難であった。

語り部 1 しかし、私達との大きな違いが一つあった。

語り部 2 それは、

語り部達 それは！

語り部 2 血の色が青いのだ。

語り部 3 そう、山姥には私達に流れている赤い血ではなく、青い血が流れていた。

語り部 4 人々は青い血を持った山姥を恐れた。

語り部 5 人々はうわさした。

語り部 6 山姥は人を食うと。

語り部 1 不吉な出来事が多く起こった年には、山姥狩りが行われた。

語り部 2 人々は山姥さえいなくなれば平和な世の中がやってくると考えたのだ。

語り部 3 前回の山姥狩りは大規模なものであった。

語り部 4 その中心的役割を果たし、山姥を絶滅へと追いやったのが、

語り部達 風賀忍者である。

1

望月 さて、それではその風賀忍者の紹介に移りましょう。最初に紹介するのは鷹丸。

鷹丸が登場する。

語り部1 鷹丸は若干十五歳の若者。

語り部2 若いだけあって

語り部3 無鉄砲で、

語り部4 冒険好き。

語り部5 直情径行であるが、

語り部6 情にもろい。

語り部1 忍者としては問題ありの性格だ。

語り部2 だが技の切れは抜群であった。

そこに二人の忍者が乱入してくる。

忍者は、鷹丸と剣で戦う。

語り部達が鷹丸を応援する。

二人は鷹丸にやられて退場していく。

語り部達が鷹丸のファンとして彼を囲む。

その輪がとけたとき、鷹丸は消えている。

サヤカが、平成の世に流行った歌を歌いながら登場。

望月 平安の世にこんな歌が歌われていたはずはありません。しかし、彼女はそれを知っていました。この少女の名前、サヤカといいます。

語り部1 サヤカは人並みはずれた能力を持っていた。

語り部2 その能力とは…

語り部3 超能力。

語り部4 先ほど彼女が平安の世に歌えるはずのない歌を歌っていたのはなぜか。

語り部5 それは、彼女が超能力の一つである、予知能力を使ったからである。

語り部6 予知能力によって、遠い将来そんな歌が歌われるのを知ることができたのだ。

語り部1 サヤカは、イタコのように死者の霊を呼び寄せることもできた。

語り部2 しかしいつでもその超能力を発揮できるわけではなかった。

語り部3 サヤカの超能力は何かの拍子に突然現れるものであった。

語り部4 残念ながら彼女の超能力が役に立ったことはない。

語り部5 サヤカはまだ十歳。

語り部6 まだまだ子ども、修行の身だ。

サヤカは平成の世にはやった歌を歌いながら舞台から去る。

語り部達はコーラス隊としてサヤカと共に歌を歌い、サヤカを見送る。

望月 次に不知火を紹介しましょう。

語り部1 不知火が得意とする忍法は分身の術。

語り部2 分身の術とはどのような忍法か？

語り部3 それは、自分の体を非常に速く動かすことで、相手に自分が何人もいるように錯覚させる術である。

語り部4 その忍法を

語り部達 ここで紹介してもらおう。

不知火が登場する。

不知火の後ろから二人の不知火が現れる。

不知火 一人の俺が、三人の俺に。これが分身の術だ。

不知火・その分身達 どれが本当の俺だかわかるか？

語り部達 お前だ！

語り部が一斉に本物を指す。

首をうなだれる不知火。

不知火とその分身が退場する。

カノミが登場する。

望月 くノ一・カノミの登場です。ご存じの方も多いでしょうが、くノ一とは女性の忍者のことです。

カノミ さっちゃん、お帰りなさい。今日の成果はいかが。ふふ、ずいぶん吸ってるわね。よしよし。誰の血を吸ったの？（指に止まっている蚊に尋ねる。その指を耳に近づけ、蚊が話していることをうなずきながら聞く）そう、よかったわね。平太夫お帰り、どうしたの、そんな憂鬱な顔をして。（蚊のとまった指を耳に近づけ、蚊が話していることをうなずきながら聞く）何ですって、彦次郎が殺された。かわいそうな彦治郎。丁重に弔ってやらなければね。

語り部1 彼女が何よりも愛するものがある。

語り部2 それは、虫だ。

語り部3 虫といっても色々あるが、このカノミの特に愛している虫は、
語り部4 蝶、
語り部3 ではない。
語り部5 カノミの愛している虫は。
語り部6 蚊、そして蚤
語り部1 カノミが得意とするのは、蚊を使ったオリジナル忍法だ。
語り部2 その一つにカエンの術がある。
語り部3 一般にカエンの術とは火に炎と書く。
語り部4 文字のごとく火と炎を使って相手を倒す術だ。
語り部5 しかしカノミの使うカエンの術は血を吸う蚊に煙と書く。
語り部6 蚊煙の術。
語り部1 それは、蚊を煙のようにたくさん飛ばせ相手を襲わせるという恐ろしい忍法だ。

カノミが術をかけるポーズをする。

カノミ おいき！

「ウーン」という蚊の飛ぶ音が聞こえてくる。その蚊の集団が語り部達を襲う。(蚊の音は語り部達が自ら出す)
語り部達が呻き声を上げて静止する。

語り部達 お、恐ろしい。

カノミが退場する。
月影が登場する。

望月 最後に紹介するのは月影。私に話しかけてきたしゃれこうべの主です。

語り部1 月影は鷹丸の兄貴分。
語り部2 一年前に師匠と呼ばれる存在となり、この地を治めることになった。
語り部3 月影は彼一人しかできない忍法の持ち主だ。
語り部4 それは忍法
語り部5 「青い月」
語り部6 「青い月」、美しい響きだ。
語り部1 さて、「青い月」とはいかなる忍法なのか。
語り部2 それはその美しい響に比例した恐ろしさを持つ忍法なのだという。
語り部3 「青い月」を見た者はいない。
語り部4 正確に言えば、見た者はいる。

語り部5 だが、見た者で今生きている者はいない。

語り部6 なぜなら、その忍法を見たものはすべて、その忍法によって命を落としているのだから。

鷹丸が登場し、月影の前にひざまずく。

月影 どうした、鷹丸。

鷹丸 師匠、「青い月」を教えてはくれまいか。

月影 「青い月」は私と共に生まれ、私と共に消えていく忍法。

鷹丸 せめて一度でいい、一度でいいから「青い月」を見せてはくれまいか。

月影 鷹丸、見ない方が幸せだ。私が「青い月」を使うのは、私達の命が危険にさらされた時なのだから。

舞台に鳴り響く笛の音。

紹介された風賀忍者達が勢ぞろいする。

その前に一人の男が忽然と現れる。

風賀忍者の頭・影友である。

月影 影友様、何用ですか？

影友 裏切り者発見の報が入ったのだ。

月影 裏切り者とは？

影友 お前の弟子だった奴よ。

月影 小太郎！小太郎が見つかったのですか？

影友 そうだ。

月影 それで小太郎は？

影友 裏切り者がどうなるか、それはお前が一番よく知っておるだろう。

月影 それでは…

影友 よかったな。

月影 ほっとしました。

影友 しかし、ほっとしてばかりもいられないのだ。

月影 それはまたなぜです？

影友 あやつの懐から手紙が出てきたのだ。

月影 手紙…

影友 その手紙にはこう書かれていた。「子ども達は生きている」と。

月影 子ども達…

影友 あやつのよからぬうわさは知っているであろう。

カノミ 小太郎は山姥を愛し、その山姥との間に子どもをもうけた。

不知火 それでは、手紙にあった子ども達とは… 山姥の子。

影友 誰がその手紙を書いたのか、それも問題だ。

不知火 小太郎を助けていた何者かが存在する。

影友 その通り。

カノミ そやつも亡き者にしないといけませんね、山姥とともに。

月影 その仕事は、私どもにお任せください。

影友 (しばらく考えて) よかろう。

月影 ありがたきしあわせ。

影友 月影よ、私が山姥をしとめたあの荒屋を覚えているか？

月影 はい。

影友 荒家に行け。

月影 わかりました。

影友 任せだぞ、月影。

月影 (深々と礼をする)

望月 ということで五人は荒屋のある鬼原山へと向かったのです。辺りがすっかり暗くなった頃、五人は荒屋にたどり着きました。

2

舞台中央に荒屋。

風賀忍者達が荒屋の前に現れる。

鷹丸 ここが影友様が三年前に山姥を倒した場所か。

月影 さっ、中に入るぞ。

鷹丸がぼろぼろに破れた障子を一気に開ける。

一斉に鳴り響く風鈴の音。

その音は、語り部がそれぞれの手に風鈴を持って鳴らす。

忍者達が辺りを見回す。

サヤカはびっくりして腰を抜かしている。

鷹丸 (笑いながら) サヤカ、どうした？

サヤカ 何でもない。(しかし、腰が立たない)

不知火 ははは、びっくりして腰を抜かしたようだな。

鷹丸 忍者がこんな音に驚いてどうするんだ。

サヤカ…

山鳴りが聞こえてくる。

それとともに鳴る風鈴。(語り部が音を出す)

鷹丸 山が鳴っている。

サヤカ あっ、あっ (突然震えだす)

カノミ サヤカ、どうしたの？

サヤカ 真っ赤、空が真っ赤。空から火の粉が降ってくる。

カノミ サヤカ、サヤカ。しっかりしな。

サヤカ 火の粉が、火の粉が…

カノミ サヤカ、心を落ち着かせるの。

サヤカ (目を見開いて、怯えている)

カノミ サヤカ！サヤカ！

サヤカ (山鳴りがおさまると同時に、我に返って) カノミねえさん、あ、あたし…

カノミ 山鳴りが幻覚を見させたのね。

鷹丸 全く人騒がせな奴だ。

月影 しかし、今のサヤカの言葉、気にかかるな。

不知火 空から火の粉が降ってくる。

カノミ サヤカの予知能力が現れたというのですか。

鷹丸 (笑って) それなら安心だ。サヤカの予知は当たった試しがないからな。

サヤカ 鷹丸、馬鹿にしないで。

風が吹いてくる。

サヤカ 予感がする。何かが、何かがここに近づいてくる。

鷹丸 サヤカ、いいかげんにしないか。

サヤカ 鷹丸、きっと山姥よ。

月影 カノミ、蚊煙の術を使うぞ。

カノミ わかりました。

鷹丸 師匠、サヤカの予知を信じるのですか？

月影 そうだ。

カノミ (人差し指を上げて) みんないらっしやい、仕事よ。

蚊の飛ぶ声が響く。(語り部が出す)

サヤカ 来る。来る。来る。今よ。

月影 カノミ、蚊煙の術だ。

カノミ おいき。

蚊の飛ぶ音が次第次第に大きくなっていく。

その音が最高潮に達したとき、突然けたたましい猿の鳴き声が響き渡る。(語り部が出す)

不知火 なんだ。猿じゃないか。

鷹丸 (笑って) 本当にお前の予知能力は素晴らしいな。

サヤカ 何かが来たのには変わらないじゃない。

月影 もういいではないか。サヤカも今日は疲れているんだ。

カノミ サヤカ、少し眠ったら。

鷹丸 そうだな。子どものお前にはねんねの時間だ。

サヤカ 鷹丸、あたし子どもじゃない。

鷹丸 お前は子どもだ。

サヤカがふてくされる。

月影、鷹丸、不知火が荒屋の中に入っていく。

カノミとサヤカがその場に残る。

秋の虫の音が響く。

カノミ 鷹丸が好きなのね。

サヤカ 好きよ。みんなだって好きでしょ。

カノミ そういう意味じゃなくて。

サヤカ …

カノミ そうなんでしょ？

サヤカ (うなずく) いいとこ見せようとしても、失敗ばかり…

カノミ 焦らない、焦らない。あなたは、まだ修行の身なんだから。

サヤカ カノミねえさんは、恋をしたことある。

カノミ あるわよ。でも、人の恋には疲れたわ。今私が愛しているのは…

そういつて人差し指を伸ばす。

蚊の飛ぶ音が響く。(語り部が出す)

カノミ この子達は裏切らないから。

サヤカ …

カノミ ほら、元気をだして。今の鷹丸にとってあなたは妹みたいな存在なの。時がたってあなたが変われば鷹丸のあなたを見る目も変わるわ。

サヤカ 変わるかな？

カノミ 変わるわよ。

サヤカ (その答えににっこり微笑む)

どこからか唄が聞こえてくる。

カノミ ちょっと。耳を澄まして。唄が、唄が聞こえてくる。

唄は客席から聞こえてくる。

サヤカ 本当だ。

カノミ みんなを呼んできて。

サヤカ (うなずく)

サヤカがみんなを呼びに行く。

客席から二人の少女が舞台に向かって歩いてくる。

菊と梅である。

菊は十五歳の少女、梅は八歳の少女である。

梅は手に紙風船を持っている。

歌われているのは『関所遊び』。

梅は気がふれたような歌い方で歌っている。

梅 ♪通りゃんせ 通りゃんせ (とおせんぼの格好をして笑う)

菊 ここはどこの細道じゃ

梅 天神様の細道じゃ

菊 ちいっと通して下しゃんせ

梅 御用のない者通しやせぬ

菊 この子の七つのお祝いに

梅 お札を納めにまいます

菊、梅 行きはよいよい、帰りはこわい

こわいながらも、通りゃんせ 通りゃんせ ♪

歌い終わった後、二人は笑う。

月影 山姥だ。

みんな 山姥！

サヤカ でも、一人はまだ子どもよ。あんなにかわいらしい山姥なんてあるかしら？

月影 子どもの山姥だっているはずだろう。

サヤカ でも…

月影 あの二人は私が殺ろう。

鷹丸 なにも師匠が殺らなくとも…

月影 子どもだと侮るとんでもない目にあうぞ。相手は山姥なんだ。
鷹丸 わかりました。
サヤカ 月影師匠、やめて。
不知火 サヤカ、どうしたんだ。
サヤカ 少し、少し様子を見させて。
不知火 忍者に情けは禁物だ。
サヤカ でも、もしかしたら山姥じゃないかもしれないじゃない。月影師匠。お願い。
不知火 いい加減にしないか。
月影 (少し考えて) いいだろう。しばらく様子を見よう。
鷹丸 師匠。本当によいのですか？
月影 ああ。
鷹丸 師匠はサヤカに甘すぎます。
月影 さっ、隠れるぞ。

忍者達が荒家に入っていく。
菊と梅が舞台に上がる。

菊 梅ちゃん。着いたわよ。
梅 あはは、あははは。きれいなお月様。あ、ウサギ。お月様にウサギ。

風鈴が一斉に鳴る。(語り部が風鈴を鳴らす)
風鈴の音と菊の笑い声が美しく重なる。
その後に秋の虫のコーラスが続く。
その音にひかれて、梅がよろめきながら歩いていく。
そして舞台中央で座る。

梅 ♪かごめ かごめ かごの中の鳥は いついつ出やある
夜明けの晩に 鶴と亀がすうべった後ろの正面だあれ♪

そのとき鈴虫の鳴き声が響く。

梅 後ろは鈴虫鈴太郎。(立ち上がり誰もいない後ろを向く)
鳴いたら誰だかわかつちゃうでしょ。はは、ははは。もう一度やるわよ。
♪かごめ かごめ かごの中の鳥は いついつ出やある
夜明けの晩に 鶴と亀がすうべった 後ろの正面だあれ♪
今度は鳴かないわね。そうね、後ろは松虫松ノ助。

そう言って振り向く。

後ろには鷹丸が立っている。
ぼんやり鷹丸を眺めている梅。
菊が鷹丸に気がつく。
他の忍者達が現れる。

鷹丸 お前達、何者だ？

菊 私は、菊。向こうにいるのは妹の梅です。私達に何か用ですか？

鷹丸 場合によってはな。

菊 場合によっては？

鷹丸 そうだ。ま、お前達が人間ならいいんだが。もし山姥なら、命をいただく。

菊 私達は人間です。

不知火 そうか、人間か。どうれ俺が本当にそうか調べてやろう。

不知火が一度に三人になる。
分身達が菊と梅を押さえてつけ、その手に傷をつける。
その傷口を分身二人が手でおさえた後、不知火に示す。
その手には青い血がついている。

不知火 青い血だ。

分身は舞台から去っていく。

梅 あ…あ…（非常に怯えて菊にすぎる）

不知火 これでも人間だということのか。

菊 …

不知火 命をいただく。

菊 なぜ？

不知火 それは、お前達が山姥だからだ。

菊 私達は人間です。

不知火 青い血の人間なんていない。人間の血は、赤いんだ。

月影 （刀を抜いて）覚悟はできたかな？

菊 妹は…妹は助けてやってください。こんな妹です。人に危害を与えるなんてできやしません。お願いします。妹は、妹だけは助けてください。

月影 残念だが、そういうわけにはいかないんだ。

月影の前に両手を広げてサヤカが立つ。

サヤカ やめて！

月影 サヤカ、なぜ止める。

サヤカ もう少し、もう少し待って。

月影 待ってどうする。

サヤカ 私達はなぜ山姥を殺さなければならないの？

鷹丸 サヤカ、やめないか。

サヤカ 鷹丸、なぜ？ なぜなの？

鷹丸 山姥が人に害をもたらすからだ。

サヤカ 私にはこの子達がそんなことをするとは思えない。

鷹丸 こいつらの血は青い。

サヤカ それだけの理由で殺すの？

鷹丸 忍者の宿命だ。

サヤカ 私は月影師匠に「忍者は正義のもとに仕事をしなければならない」という教えを受けたわ。でもこれが正義？

不知火 そうか、影友様の言っていた裏切り者・小太郎の仲間とは、サヤカ、お前のことか。

鷹丸 不知火、お前何を言っているんだ。

不知火 そうだとすれば、サヤカ、お前を殺さねばならんぞ。

鷹丸 馬鹿をいうな。こいつは俺が育てたんだ。ただ、世間知らずの子どもなだけだ。

サヤカ あたし、子どもじゃない。

鷹丸 お前は子どもだ。

不知火 それなら、話は早い。忍者にとって非情はつきもの。月影師匠、この二人は不知火が始末いたします。(菊に向かって)覚悟はいいかな、山姥のお嬢さん。

不知火は菊に切りかかる。

その瞬間、月影が不知火の刀を打ち落とす。

全員信じられないことが起こったという表情で凍りつく。

不知火 師匠…これはいったい？

月影 見てのとおりだ。影友様が言っておられた裏切り者・小太郎の仲間とは、私のことだ。

鷹丸 師匠…

月影 もう師匠などと呼ばなくていい。

沈黙

サヤカ そんなはずないわ。だって月影師匠はさっきこの二人を…

月影 殺すと見せかけて助けようとしたのだ。

カノミ 私に蚊煙の術を使わせたのはなぜです？

月影 あの時はやってくるのが猿だとわかっていた。しかし、サヤカの美しい心、それが誤算だった。

鷹丸 師匠、あなたが、なぜ？

月影 …

鷹丸 師匠が裏切り者だとすれば、俺達は師匠を…

月影 わかっている。

秋の虫の音。

サヤカ 鷹丸、みんなで抜ければ…

鷹丸 抜けるなんて不可能だ。

サヤカ でも、私達は特殊な能力を持っているわ。それを使えば…

鷹丸 今までに逃げ通せた者はいない。

サヤカ でもやってみる価値は…

鷹丸 ない。

サヤカ …

鷹丸 影友様は、そんなに甘くはない。俺達は逃げられない。

不知火 サヤカ、お前は逃げろ。しかし、俺は逃げない。俺は裏切り者としてなぶり殺しにされるのはいやだ。

月影 もういい。もう、やめてくれ。…鷹丸、私を切れ。

鷹丸 …

月影 お前との付き合いはまだ一年足らずだが、お前は私のすべてを吸収しようとしてくれた。そのお前に切られるなら、私は満足だ。

鷹丸 師匠…

月影 鷹丸、私を切れ。

鷹丸が剣を抜き月影の前に立つ。

その剣を振り上げるが手に力が入らずそのまま剣を離す。

サヤカ 鷹丸…

鷹丸 だめだ。俺には、俺には殺れない。

不知火 どうする気だ。

鷹丸 わからない。

不知火 このままでは、俺達全員が裏切り者として殺されるぞ。それでもいいのか？

鷹丸 …

菊 もうやめてください。私達が、私達が生きていなければ、あなた方をこんなに苦しめることもないんですね。

そう言った後、菊は鷹丸が投げ捨てた剣を拾って自分の胸に刺そうとする。

それを鷹丸が止める。

菊 死なせて、死なせて。この血のために、この血のために私達は…
梅 お姉ちゃん。お姉ちゃん。

梅が泣く。紙風船が梅の手から地面に落ちる。
菊も泣き崩れる。

不知火 鷹丸、お前…

鷹丸 俺はいったいどうしたんだ。山姥が自分から死のうとしているのに、それを止めちゃうなんて。

秋の虫の音。
サヤカが紙風船を拾って梅に投げる。梅が紙風船を受け取る。
サヤカと梅が紙風船について遊ぶ。
紙風船は地面に落ち、その紙風船を二人が取りにいき、同時に手を伸ばす。
二人の手が紙風船の上で重なり合う。
見つめ合う二人。そして、どちらともなく笑い出す。
そこに突然の山鳴り。
怯える梅。
自分も怖いのに、それを乗り越えて梅を抱きしめるサヤカ。

サヤカ 大丈夫。大丈夫よ。

鷹丸 師匠、教えてください。なぜあなたが風賀忍者を裏切り、山姥を助けるようになったのかを。

月影はしばらく考え、ゆっくりうなづく。

月影 忍者の掟の第一条。それは「忍者は正義のもとに仕事をしなければならない」というものだ。私はずっと、自分が行っていることは正義なのだと信じていた。

そんなとき私は小太郎と出会った。そして小太郎は私のもとで修行を始めた。あの年の山姥狩りの時、小太郎は若く美しい山姥と出会った。小太郎はその山姥を助け、かくまった。そして、二人は恋に落ちた。そのことを知ったとき、小太郎は気が狂ってしまったと思った。小太郎は私に首を預けた。しかし、私には切れなかった。小太郎の澄み切った目を見ているうちに、気が狂っているのは小太郎ではなく、私なのではないかと思えてきたからだ。私は、自分達の正義を疑った。なんの理由もなく殺戮を繰り返す自分達がしていることは、本当に正義なのだろうか。

私は小太郎を逃がした。そして、小太郎の妻とその二人の娘を助けた。

菊 それでは、あなたは…

月影 そうだ。森の神としてお前達を助けていたのは私だ。しかし、あの日、私はお前達の母親を助けることができなかった。

サヤカ あの日…

その時突然、サヤカが苦しみ出す。

鷹丸 サヤカ、どうした？

サヤカ[母] 菊、私がわからない？

菊 (えっ)

サヤカ[母] 菊、私よ。母さんよ。

菊 母さん…

鷹丸 サヤカに、この二人の母親の霊が乗り移ったんだ。

サヤカ[母] 月影様、あの日のことは、私がお話しします。あれは今から三年前のこと、あの年は山鳴りが頻繁に起こり、浅間山はたくさんの煙を吐きました。そのため農作物は大きな被害を被り、村人達はそれを山姥のせいになりました。そして山姥狩りが行われたのです。私達は、月影様の助けでそれを逃れ、ここでひっそりと暮らしていました。けれど、その小さな幸せは、あの日打ち砕かれたのです。

サヤカ[母]と月影を残して舞台上に誰もいなくなる。(ここで語り部も一緒に去る)

サヤカ[母]と月影は語り部として舞台に残ることになる。

闇の中から老婆が現れる。

老婆 すいません。どなたかいらっしゃいませんか？ すいません。すいません。

母が出てくる。

母 こんな夜遅くいかがなさいました。

老婆 道に迷ってしまいましたな。明かりが見えたのでこれ幸いとやってきました。どうか一晩泊めてください。

母 (しばらく老婆を見つめて) わかりました。どうぞお上がりください。

老婆が家に上がる。

老婆 一人でお住まいですか？

母 はい。

サヤカ[母] 私は嘘をつきました。その老婆を怪しいと思ったわけではないのですが、菊と梅のことを話せば、二人の存在が伝わってしまうと思ったからです。

老婆 こんな山奥に一人では淋しいでしょうな。

母 いいえ、もう慣れっこになってしまいました。

そう言い終わった後、老婆は突然ひどい咳をする。

母は心配そうに後ろから背中をさすってやる。

老婆は咳をしながらその母の腕を握り締める。

母 い…いたい。

老婆が手を放す。

老婆が指先を見ると、そこには青い血がついている。

老婆 青い血だ。やはりそうか。遂に正体を現したな、山姥め。

母 あなたは…いったい…

老婆がゆっくり変装をはずしていく。

老婆は影友の変装であった。

影友 人間達をたぶらかす極悪非道の山姥よ、この手にかかって地獄へ落ちな。

母 やめて、やめてください。

逃げ惑う母を影友が、笑いながらもてあそぶ。

影友と母が相対する。

影友が母を刀で切る。

母の呻き声。

影友が去る。

母が切られた胸を押さえて倒れる。

梅と菊が現れる。

倒れている母に駆け寄る菊と梅。

菊・梅 母さん。母さん。

母は何か話そうとするが言葉にならない。

そして母は息絶える。

菊、梅 母さん。母さん。

梅 やだ。やだ。死んじゃやだ。

暗転

ここで母が舞台からいなくなる。

舞台が明るくなる。

月影 私は二人の母親を守ってあげられなかった。しかし、なんとか子ども達は守ってあげようと決心した。私は森の神として二人に近づき、森の神としてずっと二人を育ててきた。しかし、幼い二人に自然はあまりにも過酷だった。梅は重い病にかかってしまった。

梅が苦しみ始める。

梅 お姉ちゃん。お姉ちゃん。行かないで。どこにも行かないで。

菊 どうしたの？

梅 熱いの。からだが燃えるように熱いの。

菊 梅ちゃん、梅ちゃん。

梅が苦しむ。

菊は梅を必死に看病する。

月影 菊の必死の看病で梅は一命を取り留めた。しかし…

梅 ふふふ、ふふふふ…ははは、はははは…

菊 梅ちゃん。

月影 そして、父親の小太郎が見つかってしまった。同時に、私が梅と菊のことを知らせた手紙も見つかってしまった。このままでは、二人が危ない。

月影が物陰から菊と梅に呼びかける。

月影 帰るんだ。

菊 森の神様、帰るってどこに？

月影 母さんのところだ。

菊 母さんの…

月影 そうだ、梅と一緒に帰るんだ。

菊 わかりました。梅ちゃん、戻ろう。母さんのところへ。母さん。私達、戻ります。母さんのところへ。母さん、どうか私達を見守ってください。

月影 今日二人はここへ戻ってきた。そして、先ほど話したように、私は二人を私の手で殺したように見せかけ、助けようとした。

登場人物が集まってくる。

サヤカ[母] 菊。梅。あなた達のこと、ずっと見守ってましたよ。
菊 母さん。

菊はそう言ってサヤカ[母]に抱きつく。
梅は笑いながらサヤカ[母]のもとへ歩いて行く。

サヤカ[母] みなさん、菊と梅をを助けてやってください。お願いします。

そう言ってサヤカは倒れる。
しばらくしてきょんととして起き上がって。

サヤカ あたし…

鷹丸が立ち上がる。

鷹丸 もうやめた。
不知火 鷹丸、お前今なんて言った？
鷹丸 聞こえなかったか。もうやめだと言ったんだ。
不知火 どうする気だ。
鷹丸 抜ける。
不知火 何だと？
カノミ ここから、逃げるといの？
鷹丸 そうだ。可能性はないに等しい。でも俺はやってみる。
菊 それではあなたが…
鷹丸 いいんだ。
月影 鷹丸、お前…
カノミ 鷹丸、私もお供させていただきます。この子達と一緒に。

蚊の飛ぶ音。

カノミ サヤカ、もちろんあなたも…
サヤカ (首を振る)
カノミ どうして？

サヤカ あたしがいると足手まといに…

鷹丸 サヤカ！

サヤカ …

鷹丸 一緒に来い！

サヤカ えっ？

鷹丸 心配するな。俺がお前を守る。必ず守ってやる。

サヤカ 鷹丸…

カノミ （菊と梅を指して）この二人は？

鷹丸 もちろん一緒さ。

菊 …

鷹丸 師匠、逃げましょう。

月影 （うなずく）

みんなが笑顔になる。

不知火 そうはいかないんだよ。

鷹丸 …

不知火 そうはいかないって言ってるんだよ。

鷹丸 不知火、お前、いったい。

不知火 影友様に頼まれてお前らをずっと見張っていたのさ。

鷹丸 何だと？

不知火 もうすぐ影友様がやってくる。さっき影友様あての伝言を鼻につけて飛ばしたのさ。

お前らが裏切ったと書いてな。お前らは、これで終わりだ。

そう言って不知火は笑いながら去っていく。